

年 頭 雑 記

編集委員長 渡 辺 要

1958 年の新春を迎えてお目出度う。さて本誌の主張とその在り方について開き直って年頭所感など記すのが恒例のようである。ここに新年号発刊に際してかようなことについて書き、考えてみることは確かに有意義にちがいない。昨今急に自然科学技術振興という言葉が新聞、雑誌に多く見られるようになり、マスコミ・ブームに乗った感があり、この時に当り本誌にとっては特にその感が深い。何か一言なかるべからずであるが、今回は編集者の立場から「生産研究」のあれこれについて雑記することに致したい。

「生産研究」は東京大学生産技術研究所における唯一の月刊誌である。本誌は昭和 24 年 10 月創刊され、昨年 12 月号までに 99 冊を刊行して今日に至った。全国殆んどの大学・研究所では国立・公私立を問わず何等かの機関誌をもって、その研究成果を発表して斯界の注目と発展に寄与しているが、本誌もその一つであると自讃している。元来わが研究所は研究者の多いことと、その研究題目が多方面にわたり、かつ研究者相互の連絡が密接に行われていることが大きな特徴の一つと云っていいだろう。したがってこの強力なスタッフによって盛り立てられている毎月の本誌上に発表される研究成果の解説・研究速報などは数学・物理・化学などのいわゆる生産技術の基礎部門はもとより、電気・機械・冶金・土木・建築等々、あらゆる工学部門に及び、その範囲は実に広汎多岐である。故に本誌はわが研究所における自然科学とその技術の研究成果を展望するには誠に好個の月刊誌であると自負しておこう。しかし毎号すべての部門について万遍なく掲載することは到底不可能なので、編集委員会で慎重協議・検討して一応バランスのとれたものにするに努め、時に重点的にロケット特集号・建築特集号などの特集号を刊行してきた。もっとも特集号、必ずしもある専門分野のみの記事を集成したものとは限らない。頁数を増大したものも、これを特集号と銘打つ場合もあることをご了承願いたい。

わが研究所では「生産研究」のほかに、読者もご承知のように、これまで 50 冊の「生研報告」を刊行してきた。これは研究所在職者とその関係者によって行われた研究成果を取纏めた報告書であるから、「生産研究」とは、おのずからその狙いを異にした貴重な刊行物ではある。これに対し「生産研究」は前記のごとく研究解説・研究速報などを主内容としており、読者対象は広く工業関係者を中心とした一般読者であるのはいうまでもない。したがってそれらの読者諸君に理解し易く、かつ興味をもって読んでもらえるよう、編集に留意し、極力平易な表現を用い一読理解できるよう書きあらわされているはずである。しかし研究者自身にとっては何でもない自明なことでも、それを読者に容易に理解されるように書くのは、なかなか努力を要することであり、時に非常に困難なことである。この点研究に多忙な日夜を過しておられる執筆者諸君の努力と苦心に多大の敬意を表するものである。そして編集が堅苦しくならないよう、マンネリズムに陥らないよう、怠ることなく自らを省みている。編集に対し読者諸君の絶えざるご批判・ご鞭撻を大いに歓迎するところである。

私は昨年 4 月から本誌の編集委員長を承っているが、1958 年の年頭に当り、本文が編集後記ともいふべき内容にもかかわらず、巻頭言の貴重な一頁を埋めた微意もここに在るのである。本誌のため各位の従前に増すご援助とご愛読を得たく、宜しく願する次第である。